

今昔物語

山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきた行橋市。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.035 新田原駅

行橋市の南の玄関口、新田原。日豊本線と国道 10 号が南北に走るこの地域の中心に、新田原駅があります。明治 30 年(1897) 9 月 25 日、豊州鉄道が行橋から長洲（大分県宇佐市、現在の柳ヶ浦）へ路線を延伸したその日、新田原駅が開業しました。

駅名の由来は、その名が示す通り「新しく開かれた土地」。駅開業の 3 年前、明治 27 年（1894）には、稲童の城戸 厳治のはからいで広島から移住した藤原吉兵衛らがモモを作付けし、3 年後に収穫。これが新田原における本格的な果樹栽培の始まりとされています。駅の開業と時を同じくして、ナシやブドウの栽培も広がり、新田原は「果樹の里」として、その名が広く知られるようになりました。

1926 年頃 / 昭和元年頃

■昭和初期の新田原駅

大正 15 年（1926）、祓郷村皆見（現在のみやこ町皆見）にトラピスト修道院の九州分院が開設され、長崎・五島から東徳永へ人々が移り住みました。昭和 5 年（1930）には教会が設立。その歴史は現在の新田原カトリック教会へと受け継がれています。

昭和 8 年（1933）、駅前に中津街道に代わる幹線道路が開通。後の国道 10 号と日豊本線が並行して地域を貫き、人や物の往来を促しました。

昭和 29 年（1954）の合併で行橋市が誕生。戦後の復興とともに新田原駅を核として市街地が育ち、昭和 41 年（1966）には小倉―新田原間が複線電化されました。「電車」の開通は、通勤・通学をはじめ、人々の暮らしと駅との結びつきをいっそう深めていきました。



▲新田原駅の木造駅舎。往来の歴史を静かに刻んできた、地域の玄関口である。

2026 年 / 令和 8 年

■現在の新田原駅

長く親しまれた木造駅舎は、昭和 55 年（1980）に改築され、現在のコンクリート造りの駅舎となりました。

現在は単式ホームと島式ホームによる 2 面 3 線。2 番線には新田原を始発・終着とする列車や、特急列車を待避する普通列車などが発着します。令和 4 年（2022）からは無人駅となりましたが、今も地域の日常を支える駅です。

令和 6 年（2024）には駅前ロータリーも完成。車道や歩行者帯、送迎スペースが整えられ、駅前も新たな姿に生まれ変わりました。



▲現在の一日の延べ利用者は約 1,300 人余り。時代は変わっても、新田原駅は地域の記憶を刻み続けている。

明治 30 年の開業以来、約 130 年にわたり、新田原駅は地域の暮らしに寄り添い、人々の営みや移りゆく風景を見つめてきました。一方、果樹園は園主の高齢化や後継者不足などにより減少し、商店なども姿を消すなど、駅を取り巻く景観も時代とともに変化しました。

これからも行橋市の南の玄関口として人と地域を結び、受け継がれてきた歴史を後世へ伝えながら、今なお息づく果樹の営みとともに、新たな「実り」が育まれる新田原の未来を見つめていく。そんな駅として、地域とともに時を刻み続けることを願っています。